

昭和の南海地震体験談

氏名:前田 鐵城(まえだ かねき)

生年月日:(当時 8 歳)

地震を体験した場所:すさみ町

当時の家族の状況:祖母、母、兄、姉、同居していた女性 4 人



1) 地震発生時の状況

当時 8 歳、兄に起こされ、境内に 2 本ある、松の木の下に行き、皆で、松の木にしがみ付いた。

長い余震で本堂(家は代々続く、臨済宗の寺)の戸が、何度も“ガタガタ”鳴って、風もないし、身体は揺れていないのに、“ガタガタ”がいつまでも続いた。

2) 津波襲来時の状況

周参見の人は、<地震＝津波連想>ある。

私の家の集落の所までは、津波は来なかった。

3) 家族の行動・被害

家族で、境内の松の木まで避難、被害なし

4) 集落・周囲の被害

大丈夫だった。

5) 地震・津波後の生活

姉の同級生の女の子は、疎開して来ていて、母と小学校に逃げる途中、引き潮で、母と離れて溺死した。船が、かなり上に流されていたり、魚が打ち上げられているのを見た記憶ある。

私は、すさみ町元助役で、「周参見町史」編集委員をしていたので、町史には載っていない、海側から見た津波の話などを聞いて資料を集めた事がある。

その内容は、1km 位沖で、イカ釣りに出ている漁師達は、ゴォーという音と、船の横揺れで、陸を見ると、海岸の岩山が火花を散らして崩れ落ちているのに気づく。「陸はアカン！沖や！沖や！」と沖を目指した。途中三度ほど船ごと上に持ち上がる感じがした。

波が静まってから浜を目指したら、途中から材木、家具の漂う中をくぐり抜けて、浜に着いた。浜のそばに家がある漁師さんは、恐る恐る家に帰ってみると、全く何の被害も無くて驚いたそうだ。川のある方向に津波が入った為である。

橋の被害は、2本ある川の両方を、数キロ遡上して、橋梁破壊していった。

ある男性は、地震後、火事予防に井戸水を汲んでおこうと、井戸のポンプを、“シュポシュポ”したが、水が上がってこないで、覗いて井戸水が無いことに気づき、「津波来る！」と、触れ回ってくれた。違う男性は、同様に、触れ回ってくれて、自分が波に持って行かれて、溺死した。

国保すさみ病院より、まだ上の河原に、日高のイカ釣り漁船が打ち上げられた。

そこまで波が来たという事。災害住宅が、後に、建った。

復旧はゆっくりだった印象、今の国道が指定受けて、すさみ大橋が出来、国道が出来て行った。合計すると20年ぐらい、掛かっている。